

浅間山火山活動の最中、
信州で
史上最高齢出産を記録。

★七月三日「前年の夏より会津磐梯山麓塔の沢に、背の高さ四尺八寸、尾と水掻があり天狗のような鼻の怪物が現れ、子どもを喰らっていたが、この日、松前三平という浪人に打ちとられる。」(五版)

★「秋に生まれた雌鶏が、いつの間にか雄鶏に変わる。」(梅野龍筆)

天明三年〔1783〕

……1783 浅間山噴火

★二月 下総関閼宿の小屋の屋根に、毛のようなものが生じた。(二話一言)

★三月末 光りものが飛んだ。(天明紀聞)

★四月三日 信州で百四十七歳になる農夫、徳右衛門の妻サツが、百三十五歳で三児を産んだ。(旅と伝説)

★六月九日より 怪しい天気が続ぎ、七月六日からは一晩中砂が降り、雷が鳴り続けた。宝永の富士の噴火に似ていたので人々が怪しんでいると、午の刻過ぎに急に暗くなり、長い雷が鳴り、山が鳴動して生臭い匂いが漂った。その後も砂が降り続けた。(番屋)

★七月初めより 一夜になると空中で鼓の音がした。一五日には江戸川が氾濫し、大きな車輪のようなものが西北より東に飛んだ。あるいは、人の腕のようなかたちで指先が六本に割れた光りものが飛び、人家に当たり破損させたとも。

(天明紀聞)

★七月八日 木曾御嶽、戸隠山から浅間山に向かって光りものが飛んだ。(番光寺遊名所図会)

★七月八日 浅間山が大噴火したとき、光りものが東の空へ向かって飛んだ。(宝暦現象集)

★八月 一京都に三日にわたって土が降る。また同月末頃より、空が紅を塗ったように赤くなった。(北窓瑣談)

★九月半頃 夕陽が光なく、その色は朱よりも赤かった。同月末頃より、

満天が紅になって人の顔に映じた。(北窓瑣談)

★一〇月晦日 江戸小日向の水戸侯の長屋の近くで、菊屋藤左衛門という紺屋が美しい着物の老女と出会い、その世話をしたが、食事もせぬまま忽然と姿を消した。狐狸の類だったのだろう。(古今雑談思出草紙)

★一人に害をなすことを恐れて、某家で犬を簀巻きにして淀川へ沈めて殺した。その家に子が生まれたが、病弱だった。ある夜、主人の夢に犬が現れて、「罪のない我をなぜ殺したか」と責めた。犬を供養すると、子は回復した。(堀野紀談)

天明四年〔1784〕

……1784 田沼意知が江戸城内で佐野政言に殺害される

★三月二日 紀州で、弘法大師の九百五十回忌の大法会が開かれた。諸国から多くの群衆が訪れたが、午の刻頃、一天にわかにかき曇り大雨が降った。何かの戒めと思った山僧らが群衆を検分すると、二人の比丘尼が山法師の格好で入山していた。二人を女人堂まで連れ出すと、天色清明になった。(爰埃隨筆)

★一毛のようなもの 同年、常陸山活動を開始、噴火と小康状態を繰り返しながら活動を続け、六月二十七日以降は度々爆発するようになった。日を追うことに間隔が短くなって激しさを増し、七月六日の大崩壊の原因の一つとなった。

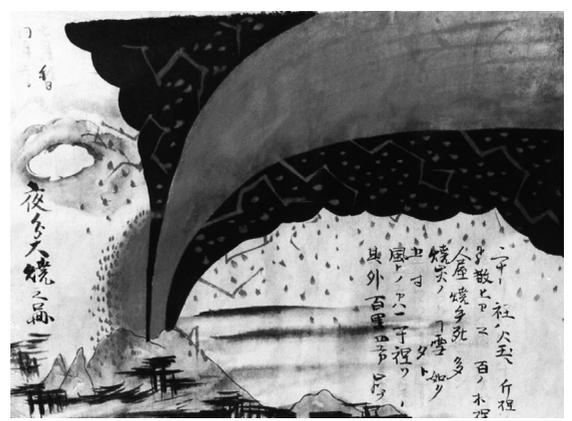
さらには、アイスランドでも大規模な噴火があったため(六月日)、噴火による塵が北半球を覆い、いわゆる火山の冬をもたし、天明

から三日間にわたる噴火では大災害を引き起した。鬼押出しは、この時に形成されたもの。同年には若木山(言二目も噴火しており、

02 天明三年の浅間山噴火▽天明の浅間噴け」とも。四月九日に火



▷右「奥州会津怪獣絵図」。▷左天明三年の浅間山噴火を報じる「夜分大焼之図」。



には「血の穢れ」という考え方があるものの、生理中の女性や産褥中の女性を禁忌の対象とする一方で、生傷を負って流血している男性が神域に入ることや、神域での狩猟なども同様な理由で禁止されている。山の神が嫉妬深い女性であることを理由に入山が制限されるケースはあるが、祭儀などにお

ける女人禁制は、ほとんどは近世以降に設定されたものである。土佐には次のような話がある。女人禁制の篠山(きさか)に尼が登り、杖を地面に挿して、この杖が生長するならば禁制が解れるだろうと誓言をした。尼は頂で消えたが、杖は青々と茂り、禁制は解かれた。